

## 雜誌『紅黑』

吉田 富夫

佛教大學

### 1

一九二九年に上海で沈從文、丁玲、胡也頻らによって文學雜誌『紅黑』が出されたことは、はやくから知られていた。ただ、筆者はこれまで雜誌そのものを目にする機會に恵まれず、隔靴搔痒の思いを餘儀なくされてきたのであるが、一九九四年に上海書店出版社から影印本が出されたことで、かねてからの渴をいやすことができた。以下、この雜誌の内容を検討し、その文學史的意味を考えてみようというの、この小文の目的である。

まず雜誌誕生の経緯を概略まとめよう。

沈從文および丁玲・胡也頻夫婦が北京から上海へと南下するのは、一九二七年末から翌二八年春にかけてのこと

である。その間の事情は、沈從文「記胡也頻」によれば次のようである。

「中國の南方革命已進展到南京，出版物の盈虚消息已顯然由北而南，北京城的好天氣同公寓中的好習慣，都不能使我們呆在一個地方不動爲得計。在上海，則正是一些新書業發軔的時節，《小説月報》因爲編者的方向略改，用了我們的文章，《現代評論》已遷上海，北新書局已遷上海，北新書局和新月書店各爲我印行了一本書，所以我四月裏就離開了北京，從海道把一點簡單行李同一個不甚結實的身體，搬到上海一個地方住下了。到一九二八年二月，他們覺得還是到上海來纔有轉機，所以也就到上海來了」〔沈從文文集〕第九卷 一九八四年三聯書店

ここに「我四月裏就離開了北京」とあるのは沈從文の記憶違いで、諸種の文獻をつきあわせて考えれば一九二七年十二月中旬とすべきだが、その詳細は省略する（邵華強「沈從文年譜簡編」参照。『沈從文研究資料』下巻 一九九一年花城出版社）。重要なのは「在上海，則正是一些新書業發軔的時節」という一節で、北伐革命の混沌とした動きの中から、上海

が出版事業の渦の中心として浮上してきた當時の情況が集約的に示されている。そして、そのような情況の下で「還是到上海來纔有轉機」と感じたというのは、たんに丁玲・胡也頻夫婦の氣分を代辯しているにとどまらず、沈從文自身は言うまでもなく、二七年十月に廣州から上海に身を落着けた魯迅などの場合にもある程度當てはまるであろう。ともかく、こうした大きな時代の流れに押し流されるようにして、三人は上海にやってきた。

「轉機」はまず、胡也頻が『中央日報』の副刊を編集することで圖られた。『中央日報』編集長の彭學沛がかつて『現代評論』の編集者をしていた頃から沈從文たちと顔見知りであったことからまとまった話らしく、丁玲などはあっさり「由沈從文推薦胡也頻去編副刊」と書いている（胡也頻）『胡也頻選集』上冊 一九八一年福建人民出版社。『紅與黑』と命名されたその副刊は、初めは週に二期、第八期からは週に四期發行で、二八年七月から十月まで、計四九期を出した（未見。前掲「沈從文年譜簡編」による）。

「紅與黑」の停刊は「從政治上看問題，處理問題」した

雜誌『紅黑』（吉田）

結果であったと前掲「胡也頻」で丁玲は書いているが、國民黨の新聞である『中央日報』と手を切ったという點を強調したかったのである。しかし、『紅與黑』の編集に手を染めたのが、四・一二クーデターの三ヵ月後であることを考え合わせれば、あまりにも割切った説明は、この際にかえって説得力を缺くことになる。とりわけ、『紅與黑』停刊につづけて計畫された雑誌『紅黑』が、少くともタイトルの上で前者との連續性を感じさせる點などから言えば、沈從文は言うまでもなく、この二年半後には共產黨員として逮捕・處刑されることになる胡也頻にしても、この當時政治的にはなお摸索情況にあったと見るべきである。この點は、雑誌『紅黑』を文學史的に評價する際に重要なポイントとなるが、後で再度觸れる機會があろう。

ところで、事情はどうであれ、『紅與黑』の編集を下りることによって、「毎月大致可以拿七八十元的編輯費和稿費」という収入の道を丁玲たちは断たれることになる。そこでいよいよ『紅黑』出版の計畫になるが、その事情を「胡也頻」の關連部分の記述から抜粋しよう。

「于是我們也想模仿當時上海的小出版社，自己搞出出版工作。小本生意，只圖維持生活，兼能出點好書。這時正好也頻父親來上海，答應設法幫我們轉借一千元，每月三分利。（略）于是紅黑出版社和《紅黑》月刊都辦起來了。

我們拿借來的錢在薩坡賽路二百零四號租了一棟三層樓的一樓一底的房子。（略）樓下做出版處，（略）我和也頻，后來加上我母親住在二樓，沈從文和他妹妹岳萌住三樓，有一個時期他母親來了也住在三樓，沈從文的哥哥和弟弟也短時住過。我們兩家人各自起夥做飯」

「薩坡賽路」は三〇年代の地圖には“Rue Chapsal”とも記されているフランス租界の通りで、現在では淡水路と名が變っているが、當時沈從文たちが借りた家はなおも残っている、一九八一年に丁玲は右の文章の中で書いている。と。

ともかく、このようにして雑誌『紅黑』第一期が発行されたのは一九二九年一月十日で、表紙は「紅黑」の二文字を赤黒二色で浮かせただけの大膽なデザインであった。第一期は一週間で一千部ちかくを賣り、「得到這個消息時我

們歡喜興奮得臉上發紅」と沈從文のちに回想し、北京、厦門、武昌、廣州などからも好反應があったので、「我們心想、以後每期應當印五千，似乎纔够分配」とつづけている（前掲「記胡也頻」）。

また、四月十日發行 of 第四期の胡也頻「編後」には「本刊第一期，現在已全數賣完，據代售處說還有人要買，所以我們決定在能力所及，即行再版」といったことも見えるのである。

なかなか好調な滑りだしであった。ところがこの雑誌は、この年の八月十日付で第八期を出したところで、廢刊に追い込まれてしまう。

奇妙なのは、それについて當事者の一人である沈從文が、『紅黑月刊』出到八期也不能不結束了，來了一個意料中的失敗」（「記胡也頻」）と書いていることである。好調だったはずの雑誌が夭折し、しかもそれを「意料中的失敗」とは、にわかには納得がいかない。なにかあったのかと探りたくなるが、その點はひとまず後回しにして、先に雑誌の内容をひとわたり検討してみよう。

雑誌『紅黒』は、要するに沈從文、丁玲、胡也頻の三人による同人雑誌である。全八期を通じて、時に新人らしい作者の習作を載せることもあるが、九五パーセント以上はこの三人の作品が占める。

唯一の例外は、第一期の巻頭を飾った桂山「李太太的頭髮」である。桂山、すなわち葉聖陶であるが、この時期すでに新文學の大御所的存在で、新人の發掘に情熱を示していた彼の寄稿は、言わば雑誌の門出に當っての御祝儀のようなものであったろう。胡也頻の「編後附記」にも、特に「聖陶先生」の名を擧げて謝意を表している。

「李太太的頭髮」は、國民革命軍の進軍にともなうて若い女性の斷髮が流行るなかで、時流に乗って髮を切るべきか否か思い惑う女子中學校長の中年女性の物語で、ある特定の場合で定められた一定の結論に向って登場人物を操っていくという點では、五四時期の〈問題小説〉の枠を一步も出るものではない。このような作品をこの雑誌の中で

雑誌『紅黒』（吉田）

沈從文や丁玲の作品と讀みくらべてみると、作品そのものの仕上りの程度とはべつに、どうしようもない發想の古さを感じさせられてしまう。そこにこの雑誌が、五四新文化運動期の次の時代の子らの一人である證左があると思えるが、その議論を詳しくしている暇はいまはない。

三人の同人の中で、いちばん充實した仕事をしているのは沈從文である。第一期から第八期までの號にも力作を載せているが、それらはおよそ三つの系列に分けられる。

まず「龍朱」(第一期)、「神巫故事之一」(第三期)、「日與夜」(第四期)、「道師與道場」(第六期)など、邊境の少数民族の神祕的な世界を描いた一連の作品がある。

沈從文の特色は、少数民族の世界に外側から光を照射するのではなく、その世界を内部から描く點にある。使われているのはたしかに漢語という外側の世界の言語なのだが、それらの漢語に假托されているのはじつは少数民族の言語そのものなのである。筆者はついつい「神祕的」というありきたりの形容語を使ってしまったが、作者にとつてはその描く世界は神祕的でもなんでもなくて、それが

世界そのものなのである。

とはいえ、作者が漢語という外側の言語を使うからには、一面ではその閉ざされた世界により開かれた外側の世界へと通路をつけることをも同時に義務づけられているわけで、それに失敗すれば、作品は普遍的な感動を讀者に與えることができなくなる。『紅黑』の沈從文は、そうした苦闘をようやく本格的に始めた時期を迎えているが、右に挙げた作品はなお摸索段階にあるように見える。

それよりも興味をひくのは、「七個野人與最後一個迎春節」(第五期)、「一隻船」(第八期)などにみられる沈從文の新しい試みである。

「七個野人與最後一個迎春節」は、漢人の支配のおよぶのに抵抗して殺される少数民族の物語である。漢人の支配は役所を作り、税金を取り立て、すべてを統制するというかたちで「地方」に浸透してくる。自然状態で暮らしてきた獵師と六人の弟子たちは、そうした支配を拒否して山中の洞窟へと逃げこみ、最後に皆殺しにされる。

北伐革命の中で、軍需品と兵隊を載せて北に向かうこと

を命ぜられた一隻の船があった。南方の少数民族地區の山中の急流を、五人の「水手」に曳かれて船は溯行する——というのが「一隻船」の骨組だが、半日餘りの危険な航程を、先行した船が急流で沈んだというエピソードや荒々しく陽氣な「水手」の姿をからめて十二ページに描き切っている。勞働の場面がとくに印象的で、黒光りする「水手」の背中が版畫のようにシルエットとなって浮かび上がる。

「船頭左右擺着，如大象，慢慢的在水面上爬行。一面絛在船桅一面繫到五人背上的竹纜，有時忽然筆直如綳緊的絛，有時又驟然鬆馳，如已失去了所有全身精力的長蛇。

天色漸暗，從船上望前岸上，拉船人的身影已漸漸模糊成一片了。灘水聲，與忍着了氣迸塌了吃奶的力拉船人的吆喝聲，也混成一片。這聲音，沒有回應，非常短，半里外就不再聽到了」

あまりにことを極端にして言っではなるまいが、沈從文自身にあっては無論のこと、新文學の流れにあっては、勞働のこのような場面をこのような呼吸で描いた文章がこれまでにあったであろうか。明らかにここで、沈從文は、よ

り開かれた現實に向かう通路の扉に手をかけていると思える。それは、なにほどこかは「七個野人與最後一個迎春節」についても言えることで、そこにはやはり北伐革命の試練を経た現實が影を投げかけているのが感じられる。

このほかに、甲辰というもう一つのペンネームで書かれた「一個天才的通信」(第六期)、「寄給某編輯先生」(第七期)の二作があるが、これらは、前述のように一時は母親から兄弟や妹まで筆一本で支えることを餘儀なくされた彼の自畫像である。ただ、これらの作品には沈從文のある種の主張がバックに含まれていると讀めるので、その意味については、これも後に觸れることにする。

### 3

沈從文に較べて、もう一人の同人の丁玲のほうは、こと『紅黒』でみるかぎりやや精彩を缺く。總じて言えば、その前年(二八年)十月に出した第一短篇集『在黑暗中』の地つづきで仕事をしつつ、新しい展開を探っているように見える。

作品としては、「慶雲裏中的一間小房裏」(第一期)、「過年」(第二期)、「小火輪上」(第三期)、「日」(第五期)、「野草」(第六期)を書いているから、仕事量としてはかなりのものだが、内容的にはいまひとつ充實したものがない。

とはいえ、「慶雲裏中的一間小房裏」のような佳作もないではない。上海の娼婦を描いた作品だが、ダルな氣分の中で半分眠りながら客を送り出す場面から始まる一日は、頹廢の暗さのかわりに、それなりに割り切って「自由」に生きる底邊の女たちのたくましさを浮かび上らせていて、『在黑暗中』の諸作品とはひと味違う可能性を予感させる。

かと思うと、「野草」のように、「莎菲女史の日記」とよく似たテーマをあつかいながら、習作めいた凡作におわつた作品もある。野草はこの作品のヒロインの名だが、小説を書いている二十四歳の彼女は、男の求愛に對して、「我也很空虚，但是我却没有那愛情的欲望」と言つてそれを拒絶する。莎菲にちかいイメージである。ところが、莎菲と違つて、野草の場合は作者の内面の苦惱を注ぎこむという面倒な手間はほとんど省かれて、愛を拒否する女という趣

向ばかりが鼻につく、こしらえ物に終っている。作品の出来不出来はいつの場合もやむをえないが、都會生活の倦怠を描こうとしたらしい「日」などにも似たような觀念性がみられるところから言えば、この時期の丁玲がある種の足踏み状態にあったことは否定できない。

ところで、雑誌『紅黑』を編集事務の面ですべて切りまわしていたのは、胡也頻であった。「胡也頻」によれば、

「沈從文和我都做了一些工作，但所有事務主要是也頻一個人去做。如跑印刷廠，校對，同書局商談，代銷，收款等等都是他做」

とある。少年時代に飾り職人の下で徒弟奉公をしたこともある胡也頻は、身體を動かすことが嫌いではなかったとも丁玲は書いているが、ともあれ、雜務はすべて一人で背負いこんでいたようである。

その胡也頻も、「子敏先生的功課」「便宜貨」（以上第一期）、「一個村子」（第二期）、「三個不統一的人物」（第三期）、「苦刑」（第四期）、「一個獵人的自敘」（第七期）などの小説を載せているが、どれもあまり上手くはない。作者の觀念

で小説の世界が塗りつぶされて、登場人物が自動的に動く餘地がほとんど無いからである。

胡也頻の場合はむしろ、べつの沈黙のペンネームで毎號のように發表した詩のほうに、見るべきものがある。できるだけ傾向の異なる詩を二首、それぞれ前半のみを舉げてみよう（紙幅の關係で改行を、聯と聯の開きを〃で示す）。

「如同是一粒火種，／由萌芽，伸展，／成燦爛之朝陽。

〃當旺盛之時，／可使玉石粉碎，鋼鐵變軟，／化黑暗爲光明。」（「生命的象徵」第四期）

「窗外是一重黯色薄紗，／又似是朦朧的夢境，／給人以回憶之情緒，／恍然——晚霞已不在天際。〃樹梢的幾點星光，／旋閃，旋滅，／如作態的女人之睨眼，／帶點不忠實的意思。」（「夜」第一期）

一九二九年の當時にあっては、これらの詩句はひとまずレベルに達したものとして讀むことのできるものであった。

4

そこでふたたび沈從文の言う『紅黑』の「意料中的失敗」

の件にもどう。

第一期の巻頭には「編者」による「釋名」が掲げられ、この雑誌の題名の由來が説明されているが、その要點は以下のようである。

「紅黒兩個字是可以象徵光明與黑暗，或激烈與悲哀，或血與鐵，現代那勃興的民族就利用這兩種顏色去表現他們的思想——（中略）但我們不敢竊用，更不敢掠美，因為我們自信並沒有這樣的魄力。（中略）所以我們取用紅黒爲本刊的名稱，只是根據於湖南湘西的一句土話。例如『紅、黒、要吃飯的！』這一句土話中的紅、黒、便是『橫直』意思，『左右』意思，『無論怎樣都得』意思。這意義，是再顯明沒有了。（改行）因爲對於這句爲人『紅黒都得吃飯的』土話感到切身之感，我們便把這『紅黒』作爲本刊的名稱」沈從文の手になるという（前掲邵華強）この「釋名」は、言うまでもなく韜晦である。雑誌成立の經過からみて、『紅黒』の二字が『中央日報』副刊『紅與黒』を踏まえていることはたしかで、それはまさに「光明與黑暗，或激烈與悲哀，或血與鐵」を象徴するものであったと考えられる。現

雜誌『紅黒』（吉田）

に雜誌第三期の巻頭には、「編者」によって、

「地球上沒有黃金是鐵色的；所以要經歷一個黯澹人生，纔充分地表現這人生的可悲事實。／文藝的產生是因爲缺陷的，並且爲這缺陷的人類而存在着。／要創作，必須深入地知道人間苦，從這苦味生活中訓練創作的力。／文藝的花是帶血的」

といったそうした方向を示すことばも掲げられているのである。だとすれば、何故の韜晦か。

その理由は、おそらくおなじ第一期の胡也頻の「編後附記」にある、

「我們出這月刊，並沒有別的背景，就是我們既不依靠於專心樹立資本主義的書店，又不受惠於闊人的津貼，（以下略）」  
といったことばを手がかりに推測することができるであろう。

周知のように北伐革命を機に創造社が左旋回し、革命文學の提唱があり、ついで民族主義文學がそれに對立するものとして現れた。その間に華々しい論争が展開されたが、



そこにはたとえ(「革命文學」を呼號しながら)つは出版資本にもたれかかるといった奇妙な現象も少なくなく、それを押捺したことから魯迅と革命文學派との間に論戦が起つたことはよく知られている。

そうした情況下で、北京から出てきたこの三人のようやう世間に名が出たばかりの若い文學者たちは、「既不依靠於專心樹立資本主義的書店、又不受惠於闊人的津貼」という道を夢想したのである。それはむろん政治的選擇などではなく、むしろ純粹な文學空間を保持しようという試みであつたが、一方では「光明與黑暗」をにらみながら、「紅黑都得吃飯的」と韜晦してみせたところに、一九二九年の沈從文たちの若さゆへの樂天性があつた。

しかし、「意料之中失敗」は予想より早く、第八期で資金ぐりにつまつて廢刊した際には一千元餘りの借金が残つた。そのうち、三百元は沈從文が負擔し、三百五十元はこの後濟南省立高中に就職した胡也頻が月給から返し、残り丁玲が母親に借金して清算したという(「胡也頻」)。

『紅黑』廢刊後の三人の運命は、それぞれに苛酷であつ

た。一人は早くに共產黨員として處刑された。生き残つた二人のうち、一人は同じく共產黨員文學者として、榮光と地獄とをくり返し體驗させられた。もう一人は、文學者として輝いた前半生ののち、文學者としては世間から事實上抹殺された。その二人は、人生の最晩年を迎えた一九七〇年代末に、ようやくあるがままの姿で世に迎えられることになるが、そこでもなお、三〇年代の胡也頻の死や丁玲の逮捕・軟禁の記憶をめぐつて惡罵にちかいことばで應酬する運命にあつた。が、それらについての考察はべつちの機会にゆづらざるをえない。

ただ、そうした後の展開を逆にたどつてみると、ほかにもかなりの流れが『紅黑』が發行された一九二九年前後に行きつくように思える。その意味で、格別に獨自の文學的主張ももたなかつたこの同人雜誌の存在は、新文學の展開の上で、多くのものがいまだ未分化の情況にあつた原點とも言うべきある時期の象徴的存在とも言えるように思う。